神奈川県考古学会

考古かながわ

第18号

2000年3月31日

明日はわが身…！？

神奈川県考古学会幹事
連絡誌担当　土　井　永　好

私事にわたってたいへん恐縮ですが、昨年末のＹ２Ｋ騒動の最中、それが影響してか、私の頭も１カ月近く鈍い痛みに悩まされました。「すわ一大事！Myコンピュータ・チップにトラブル発生か？」などと、疑心暗鬼する始末。齢40を重ね、厄年、ましてや後厄まで終えたにもかかわらず、身体の危機に不安を感じたのでした。人生の折り返し点に立って、初めて成人病を意識し、ＣＴ検査を受ける羽目に……。

さて成人病と言えば、縄文人もその代表的疾患の一つに悩まされたようです。痛風――。そうです、発作時は風が吹いただけでも痛いという例のすごいヤツです。広島県尾道市高須町にある大田貝塚（3500～4500年前）の出土人骨を分析した滋賀医科大学・整形外科チームの発表によりますと、患者は縄文中期の推定40～54歳の男性。右足の小指、薬指、親指の各付け根部分にある中足骨頭の一部に、えぐられた跡があり、周囲に骨膜を持ち上げるような形で骨が新生していたとのこと。骨新生は尿酸結晶が沈着したために起きる痛風特有の変化なので、罹患していると判断されました。痛風痕はエジプトのミイラにも見られたようですが、調査に当たった井上康二助教授の話では、この大田貝塚人はそれより古く、医学的に世界最古の患者例だそうです。

皆さん御存知のとおり、痛風は「帝王病」とか「ぜいたく病」とされ、肉類やアルコール類を多く摂取した結果、尿酸の生成と排泄のバランスが崩れた時に起こる疾患です。アレキサンダー大王やエジソンなど歴史上の天才肌の人物も患ったようですが、現代では40～50代のいわゆる中年世代の男性、特にその食生活も含めて、自身の健康には無関心な仕事中心人間に広くまん延しています（女性は、ホルモンの関係で痛風の基礎となる高尿酸血症になりにくい！）。

話は戻って、大田貝塚。瀬戸内独特の気候・風土に支えられ、日々の食べ物には恵まれたのでしょう。件の男性は年輩の族長なのか、文字どおり、“酒池肉林”の夜を過ごし、竪穴住居内で熟睡中、急に足指の付け根に激痛が走り跳び起きた姿を想像させてくれます。先の井上助教授は、栄養摂取の良好さと痛風発症とは密接な関係があって、肥満や階層文化がなかったとされる狩猟採集の時代に痛風があったならば、すでに縄文人に富裕層が存在した可能性があるのでは、と門外漢ながらも示唆されています。

近年、厚生省は「生活習慣病」という概念を導入しています。加齢よりも日頃の暮らし振りということなのでしょう。そこで、仕事＆学問＆酒宴好きの男性会員諸氏よ！縄文人も味わった病の辛さに襲われることのないよう、身体の管理やストレスの発散を心掛け、世紀末の日常を健康にしていこうではありませんか…。

＊大田貝塚（おおたかいづか）

縄文中期を中心とする貝塚で、ウミニナ・スガイなどの巻貝が主体。1926（昭和元）年の発掘以来、数次にわたる調査で70余体の人骨が出土。最近では、貝層の下に縄文前期の土器を包含する砂層が確認され、１体の人骨が出土したことから、人骨のいくつかはこの時期に溯る可能性がある。

（『日本史広辞典』より）

長柄・桜山古墳の見学会に参加して

会員　菊　川　英　政

11月６日は秋の日差しも暖かい快晴の土曜日で、ＪＲ逗子駅に集合した一団は和やかに挨拶を交わしていた。私はいち早く買い求めた駅弁をデイパックにしまいながら、出発の時間が来るのをじりじりと待っていた。今日は1900年代最後の発見と言える逗子・葉山境の前方後円墳を見に行くのだ。考古学上の意義はあとで勉強するとして、整備される前に是非見ておきたい場所である。

見学会役員から１号古墳の発見者である東家氏が紹介された。古墳発見の経緯は「考古かながわ」第17号に掲載されたが、今日は現地までの案内もしていただけるという。予定時刻を30分遅らせていよいよ出発。地元の人ならではの裏道をたどって、およそ15分ほどで葉桜山住宅地の下に到着する。ここからは細く急な山路である。一列になって進むと登り口で人数を数えている。87名。ここ数回、参加者が20名を切る見学会にとっては大盛況である。一行はつづらおりの山路をおしゃべりしながら登って行く。暗い谷間を抜けると住宅地の端に出た。なんと元サッカー日本代表を務めたＯ監督の家のすぐ横であるらしい。さて、目的の古墳は東家氏が指さす尾根の頂上部にある。ここから眺めると古墳を乗せた森が住宅地の上に浮いているように見えるから不思議だ。ここで寺田会長の挨拶があり、一同揃って記念撮影を行った。

１号古墳はハイキングコースを入ってまもなくの所にある。下草が刈られているため墳丘の形がよく判る。後円部の中程まで登って見ると前方部へ続くくびれのラインがじつに美しく、これが1600年余を経た姿とはとても信じられない。小さな土器片を拾った事に始まり、目の前の丘が前方後円墳であると確信した時の東家氏の感動が伝わってくるようである。一行は東家氏の発見談を聞き、墳丘を登ったり降りたり、隅から隅まで観察し堪能した後、２号古墳へと向かった。

久々の盛会を祝して

２号古墳はハイキングコースを南へ500ｍ程歩いた所にある。前方部の端に展望台があり、眼下に陽光きらめく相模湾、遠くには江ノ島と富士山を望む絶景の場所である。１号古墳が墳丘の美しさを誇るなら、２号古墳は立地景観の秀逸さを誇りたい。墳丘はむしろ荒々しい印象があり、よくこれが前方後円墳だと判ったなと感心した。２号古墳は見学会役員の田村良照氏が発見されたという。田村氏に試掘調査の様子を伺いながら墳丘裾を歩いてみると、自然地形を利用した前方部の偉容さに感動した。

さて、ハイキングコースを蘆花公園へと下り、記念館の中庭を拝借して弁当を広げる。ここで見学会は終了し解散となったが、日暮れまで間があるし、希望者を募り最近できた池子遺跡群資料館まで足を伸ばすことになった。ゲートに立つ迷彩服姿の衛兵に緊張し、資料館ではエレベーターの操作ミスで消防車が来るハプニングもあった。そして、最後の締め括りは逗子駅前に戻っての反省会である。一日中歩いた疲労感よりも楽しかった充実感が優り、杯を重ねつつ「１号墳は東家塚、２号墳は田村塚と命名したらどうか」など発見者の栄誉をたたえる声もあがった。見学会役員の方ご苦労様でした。次回も素晴らしい企画を期待しています。

新企画－かながわの史跡めぐり
かわさき編　Part 1
～東高根遺跡・馬絹古墳・西福寺古墳～

会員　服　部　隆　博

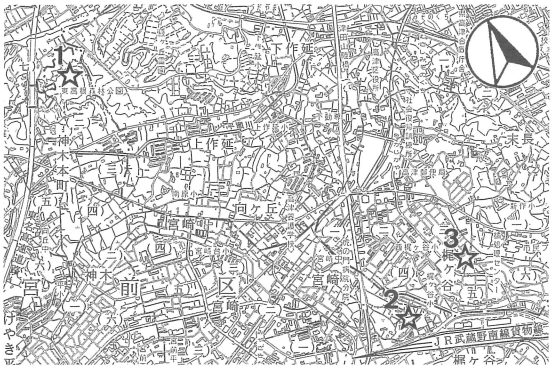
豊かな恵みを与えてくれる“母なる川”多摩川。この多摩川に沿って南北に細長い市域をもっている川崎市は、海浜・平野・丘陵と、変化に富んだ地形をしています。旧石器時代から今日にいたるまで、人々は川崎の地を舞台に生活の営みを繰り広げ、特色のある地域文化を形づくってきました。今回と次回で、川崎の史跡をご紹介しながら、川崎の歴史や文化に触れていただきたいと思います。

東京方面から東名高速道路を走ってくると、多摩川を渡って３番目の高架橋に高根橋があります。このすぐ東側に神奈川県指定史跡の東高根遺跡(1)があります。遺跡は神奈川県立東高根森林公園の中にある古代芝生広場という所で、弥生時代から古墳時代（３世紀～８世紀）にかけての台地ひとつ分に及ぶ大集落跡です。遺跡の保存を最優先にしていますので竪穴住居などは地下に埋まったままですが、台地の斜面に繁茂するシラカシ林（県指定天然記念物）とあわせて、古代の人々が生活していた景観をしのぶことができます。

所 在 地：川崎市宮前区神木本町２－416－１

交通案内：ＪＲ「武蔵溝口駅」から川崎市営バス溝15～19系統で「森林公園前」下車

高津区梶ケ谷周辺には古墳がたくさんあります。なかでも馬絹古墳と西福寺古墳は神奈川県の史跡に



馬絹古墳公園

指定されています。馬絹古墳(2)は７世紀の後半に造られた古墳で、見かけは小さな円墳ですが、内部は全長9.6ｍにも及ぶ３部屋に分かれた大形の石室があって、しかも内部は白い粘土で装飾されています。副葬品は盗掘されてしまいましたが、古墳の造り方などには古代朝鮮半島の影響がみられ、ここに葬られた人物は高い文化レベルと政治力・経済力をもった有力な地方豪族であったことがうかがえます。石室の内部は保存のために公開されていませんが、レプリカが川崎市市民ミュージアムにありますので、ご覧になって下さい。

所 在 地：川崎市宮前区馬絹994－８

交通案内：東急田園都市線「宮前平駅」から川崎市営バス城11系統で「金山」下車、徒歩15分

馬絹古墳から北東に15分ほど歩くと、梶ケ谷第３児童公園の中に西福寺古墳(3)があります。この古墳は直径が約35ｍの円墳で、６世紀後半頃に造られたと考えられています。古墳の内部は発掘されていませんが、古墳の周りをめぐっている溝からは水鳥や円筒形の埴輪が発見されていて、川崎市内でも埴輪のある古墳としては貴重な存在です。

所 在 地：川崎市高津区梶ケ谷３－17

交通案内：東急田園都市線「梶が谷駅」から川崎市営バス溝23系統で「大原」下車、徒歩５分

今回ご紹介しました史跡は、溝口や梶ケ谷、宮前平周辺ですので、１日で十分散策できます。

新企画－最近注目の遺跡

妻木晩田遺跡群

幹事　近藤英夫

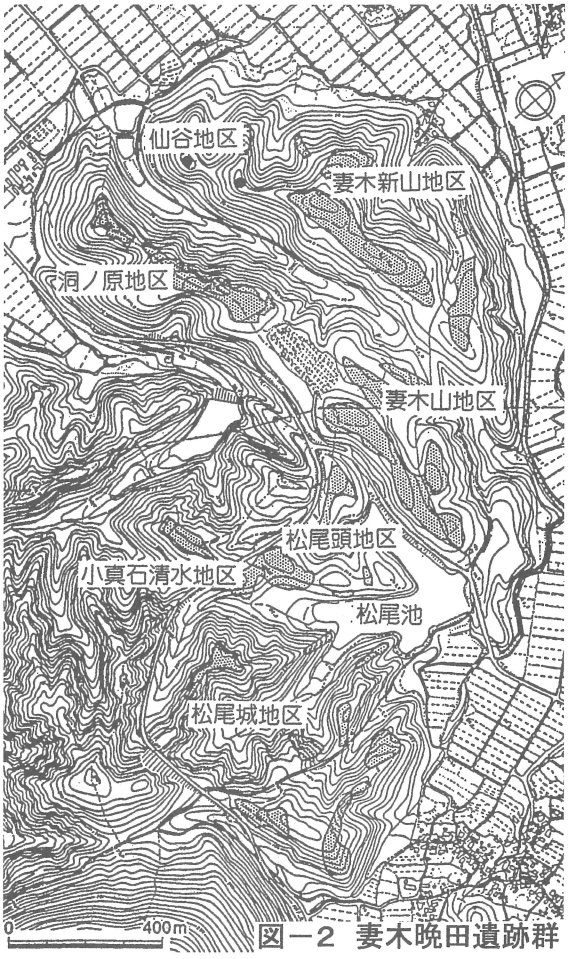
1980年代以降、島根県、鳥取県では弥生時代に関して大きな発見が相次いでいる。大量の銅剣を出土した島根県の神庭荒神谷遺跡や銅鐸39を出土した同県の加茂岩倉遺跡が、その代表的な例である。これらとは性格が異なるが、妻木晩田遺跡群も、当然、この大発見のうちに加えられる遺跡群である（図－１）。

妻木晩田、「むきばんだ」と読む。関東ではあまり耳馴染みのないこの遺跡群は、鳥取県西部の大山町と淀江町とにまたがってのびる標高90～150ｍの丘陵一帯にある（図－２）。丘陵西端からは淀江平野、日本海が一望できる。時期は、弥生時代中期から後期を経て古墳時代前期までにおよぶ。大集落である。

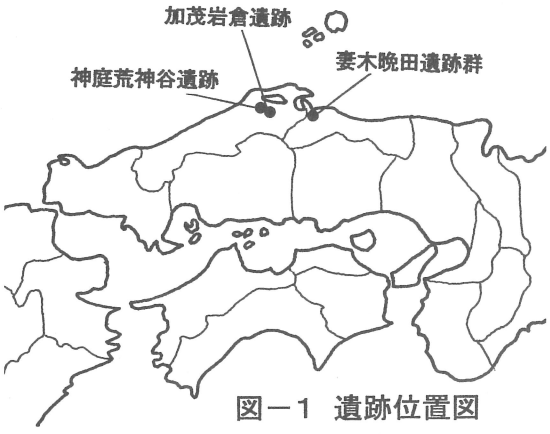
当初この地域には、ゴルフ場造成が予定されていた。ここからの日本海はこよなく美しい。その景観のよさを見越しての計画である。ゴルフ場造成に先行して発掘調査が行われた。

調査で７つの遺跡が確認された。遺跡群の総面積は、156haになる。遺跡相互の間には谷が入るので単純な比較はできないが、面積は九州の吉野ケ里遺跡（117ha）を凌駕している。

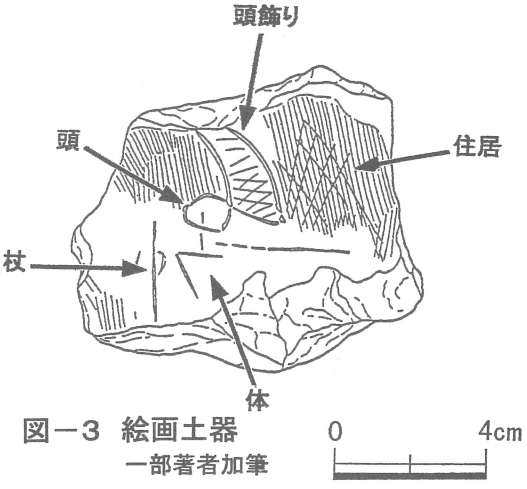
この遺跡群が注目されるのは、単にその規模ばかりではない。それぞれの遺跡は、関連しあって、いわゆる「ムラ」をつくっていた。



図－２　妻木晩田遺跡群



図－１　遺跡位置図



図－３　絵画土器
一部著者加筆

洞ノ原地区（墓域）では山陰地方の弥生時代を特徴づける四隅突出型墳丘墓と呼ばれる墓が発見されている（図－４）。この墓は首長墓と考えられるものである。計11基の四隅突出型墳丘墓が発見されているが、その中には一辺２ｍ弱のきわめて小型のものがあり、小児の墓と推定されている。さらに仙谷地区からも２期の四隅突出型墳丘墓が発見されている。

弥生時代を特徴づけるもう一つの墓に、墳丘墓があるが、それは、洞ノ原、仙谷、松尾頭各地区から、計19基発見されている。

松尾頭地区では、祭殿とおぼしき建物址が発見されている（図－５）。これは、建物の両長辺に庇がつく掘立柱建物で、本体部分の規模は長辺6.8ｍ、短辺3.4ｍである。この地区からは、頭飾りをつけた人物と建物を描いた線刻のある土器片が発見されている。調査者は、ここに描かれた人物をシャーマンとみている（図－３）。

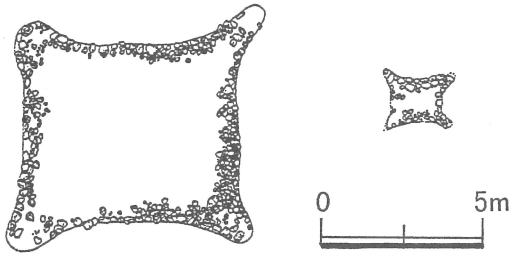
また、妻木新山地区からは、倉庫（掘立柱建物）址が、80棟以上発見されている。ムラの貯蔵空間と考えられている。

仙谷地区以外の各地区からは竪穴住居が発見されているが、その数は380軒を越えている。先に述べた倉庫・住居は、もちろん遺跡群の存続期間約200年の中でつくられた総数である。したがって、同時期に何棟、何軒の倉庫・住居が存在したかを直ちに示すものではない。しかし、遺跡群の規模の大きさを示していることはまちがいない。

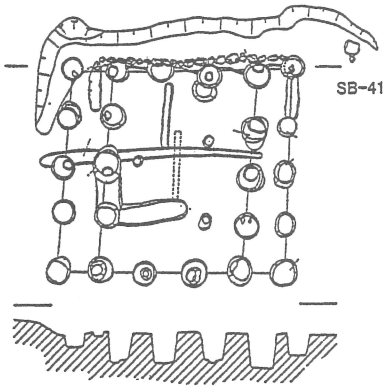
この遺跡群について、弥生時代の「ムラ」と紹介したが、遺跡群の規模や祭殿のような特殊な遺構があることなどから、調査者は一般的な「ムラ」ではなく、「クニ」の中心をなした「ムラ」と考えている。

妻木晩田「ムラ」の存続期間は、およそ紀元後100年頃から300年まで、最盛期は200年頃。この時期は、魏志倭人伝の時代とオーヴァラップしている。卑弥呼の活躍した時代の様相を把握する。妻木晩田遺跡群に、われわれがあつい視線を注ぐ理由は、まさにそこにある。

調査後、様々な経緯を経て、開発計画は中止となった。遺跡群は全面保存されることとになり、今、史跡としての整備を待っている。



図－４
四隅突出型墳丘墓（右：1号墓　左：11号墓）



図－５　庇付大型建物（祭殿）

（図は、鳥取県教育委員会『むきばんだ』1999、および現地説明会資料より転載しました）

考古学講座

『かながわの古代寺院』を終えて

１．小出先生のゆったりしたいつ終わるのかと少しはらはらした最後のまとめを聞いて、講座は終った。当日会場の全席を埋めた270名の参加者は最後まで熱心であり、盛会裏に講座を閉めることができた。各寺院の最新の研究成果を発表いただいた河野一也氏をはじめとする講師と司会、コメン

トをいただいた鈴木靖民先生をはじめとする諸先生方と当日も含めて講座を支えてくれた考古学会の役員諸氏と講座に参加した全ての皆さんに感謝のことばを捧げたい。河野さんらは関東古瓦研究会の大会と重なったが本会に出席いただけることができた。

神奈川県の古代寺院の研究会は、県内では初めての開催である。ということでかなり気楽に構え、網羅的に紹介すれば第１回の役割を果たせると考えていた。そして古代史研究者はできるだけご遠慮いただいて考古学からの成果を整理しておきたいと思っていたが、直前になって青山学院大学の清水さんが参加できなくなり、急遽藤沢市教育委員会の荒井秀規さんに千代寺院跡のコメントをお願いしたり、鈴木靖民先生に最後のまとめをお話いただいた。結果として『かながわの古代寺院』の次回の構想が提起されたのである。瓦の移動と展開は政治力によるものが大きいだけに相模国の動向を知る上で重要な課題となるのである。

2．神奈川県考古学会の主催する考古学講座は、他県にはないユニークな特性がある。入門講座として第１回を開催して以来、一般の聴衆の増加を期待して、それは考古学ファンを増やして考古学や埋蔵文化財の仕事をしやすくしていきたいという願いが込められていた。その一方で岡本勇先生の会長就任の挨拶にあったように、考古学会と名乗る以上柱となる研究活動を活発化させようという意見も根強い。

会の運営ではいつも研究か普及かということで議論が堂々巡りに陥るのであるが、今回の講座は、それに明確な結論を示すことができた。普及をめざしても思うほど集まらなかった現実に対して、研究者として新しい成果を用意し自分たちがまずは楽しめる会にしたい。そんなことを貫くことで希望する結果はついてくるのではないかと。

今回は発表要旨を従来の１件４ページから８ページに倍増させ、資料集として瓦と村落内寺院関連遺物などをまとめることができた。140ページ以上の大部となったが、会員には安く頒けることができた。

3．事前の宣伝活動に力を入れた。１年前の講座時にはまだ正式決定していなかったが、初夏の総会で古代寺院関係の講座とすることが承認されて以来、半年前の伊勢原市における遺跡調査研究発表会でチラシを配布し、以後小田原市の千代寺寺院跡のシンポジウム、横須賀考古学会の発表会、東海大学での「相模国の成立」シンポジウム、海老名市での講座、藤沢市の遺跡調査発表会、伊勢原市での直前の遺跡展の会場などで配布をお願いした。（茅ヶ崎市の発表会では用意を忘れた。）

近県に資料調査などに赴いた際にはチラシを持参して宣伝に務めたりもした。また近県埋蔵文化センターや大学の考古学研究室などにポスターとチラシを送付した。県内の公私立高等学校にも送付した。当日に高校生の姿は私は確認できなかったが、先生から問い合わせの電話を受けている。会としての新聞発表はしなかったが、茅ヶ崎市教育委員会の努力により直前に下寺尾寺院跡関連遺跡からの県内初の漆紙文書の新聞掲載があり、ダメオシすることができたのは幸いであった。

4．コメントとまとめを中心に成果集を作成したい。そして期待される５年後に繋げたい。今回の講座に参加された人も参加されなかった人も含めて引き続いてご協力をお願いしたい。当日は質問を受付しなかったが、質問や希望を事務局までどしどし寄越してほしい。できるかぎりそれらにお答えして成果集などに生かしたい。

再来年の2002年は赤星直忠先生の生誕100周年の記念の年であるので、神奈川考古学赤星年と統一して記念事業を開催し県下あげて盛り上がりたい。

（幹事　岡本孝之）

＊会費納入のお願い＊

当会の運営は、会員の納める会費で行われています。うっかりお忘れの方、意識的にお忘れの方、今からでも間に合いますので、ぜひ事務局までお納めを！（奥付参照）

第23回　神奈川県遺跡調査・研究発表会が伊勢原市にて開催される

1999年９月12日に伊勢原市民文化会館において、第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会が開催されました。当日は地理的条件が悪いのにもかかわらず、考古学ファンのみならず、地元伊勢原の市民からも多数の参加があり、用意した発表要旨が全て頒布終了するほどの大盛況でした。参加者は500人以上、会場もほぼ満員で、活気あふれる発表会となりました。

開会にあたり主催者の神奈川県考古学会寺田兼方会長、開催地の伊勢原市教育委員会山口恒哉教育長の挨拶の後、昨年度及び今年度の注目された遺跡を10件、今年度の速報１件の11遺跡の発表が行なわれました。

1．**綾瀬市上土棚笹山遺跡**では、旧石器時代の文化層が３枚検出され、特に第Ⅲ文化層は７つのブロックと角錐状石器、ナイフ形石器、掻器など石器にバラエティーがあり、相模野第Ⅲ期に位置付けられます。大規模の遺跡と小規模の遺跡の間に器種レベルでの大きな差がないことや遺跡における人間集団の活動内容を石器組成がストレートに反映しているものとして、大規模遺跡との間には活動の量的な差異と質的な差異について検討を重ねるべきと課題が提唱されました。

2．**伊勢原市田中・万代遺跡**では、旧石器時代から近世まで数多くの遺構が確認され、特に古墳時代の陥穴状土坑には大変珍しい逆茂木がありました。そして、今回の調査で伊勢原市田中地区周辺の低地部分においてこれまで不明瞭だった古墳時代中期の集落が確認され、また、県内でも検出事例の極めて少ない縄文時代の中期の五領ケ台Ⅱ式～勝坂式期古段階の竪穴住居址が発見されているとの報告でした。

3．**小田原市中里遺跡第Ⅰ地点**では、弥生時代中期の須和田式期の竪穴住居址89軒、掘立柱建物址63棟等数多くの遺構が発見されました。出土遺物も須和田式土器と畿内第Ⅲ様式の古段階に相当する瀬戸内東部の土器群、石器は大陸系磨製石斧と石包丁、大型打製石鍬、大型有茎石鏃、磨製石鏃、石皿等、その他木製品や自然遺物も出土しています。今回の調査によって、南関東において本格的な弥生文化が広がるのは弥生時代中期後半からの通説を覆し、そのほとんどの要素が中期前半に既に揃っていることが確認されました。そして、東日本弥生農耕集落成立期の最大規模の遺跡として、本遺跡の持つ意味は大変大きいものがあるとの報告でした。

4．**逗子市池子桟敷戸遺跡**では、縄文晩期から近代までの多くの遺構が確認され、中でも弥生時代中期の方形周溝墓が15基検出されています。池子遺跡群の中で弥生時代中期の墓域が確認されたことは大きな成果であり、また、方形周溝墓の規模から見て、周辺に同時期の大規模の集落が存在することは間違いなく、近隣の遺跡との関係も興味深いとのことでした。

講演「伊勢原の古墳」（東海大学文学部教授関根孝夫）では、伊勢原市を中心に平塚市、厚木市など相模川西岸域の古墳について長年の研究成果を披露していただきました。古墳そのものの概説から、相模地域の古墳、伊勢原市域の古墳といった細かな地域的動向までわかりやすい解説で、今回新しく、相模川流域の前期古墳について各小河川ごとのまとまりを重視するべきとの見解を示されました。関根先生は、相模川の右岸、左岸をひと括りとする従来の考えに対し、両者を別々に扱うことを主張されていましたが、それをさらに進めた形となりました。今後の研究に与える影響も大きいと思われます。

こうした見解は、発表要旨に見られますように先生の緻密な資料収集を基礎としており、特に伊勢原市域においては、発掘調査のデータだけでなく、現存する古墳の踏査、測量、過去の文献から

の読み取り、三之宮比々多神社に保管されている出土品の観察などを、先生自らが積み重ねられている姿を拝見しています。そうした経験が随所にちりばめられ、考古学に関わるものにとっては、常に実物にあたり、観察するという基本姿勢を改めて教えられた講演だったと思います。

5．**速報長柄・桜山第１号・第２号墳**では、前方後円墳の発見の報告で、試掘調査と出土した壷形埴輪についての速報で、調査したてのホットなものでした。

6．**厚木市ホウダイヤマ遺跡**では、前方後円墳と円墳等が確認され、前方後円墳の周溝から小型器台、小型丸底坩、中型丸底坩、大型壷形土器等が出土しました。小型の土器は非常に精製されており、畿内系のものと見られています。また、現時点では大型壷形土器は壷形埴輪としませんでしたが、土器の年代観は４世紀後半から終末にかけてで、畿内を中心とする政治勢力の波及とそれを受け入れる豪族の存在が窮われ、長柄・桜山古墳との存在と共に新たな歴史像が見えてくるとの話でした。

7．**平塚市広川・公所遺跡群**では、古墳時代前期の集落から小銅鐸が出土しました。この小銅鐸を中心に、小型土器が竪穴住居の隅から多く出土したり、白色粘土や小石が敷かれた上から出土する例もあり、住居内祭祀として捉えられるのではないかとの発表でした。

8．**平塚市真田・北金目遺跡群**では、旧石器時代から近世・近代までの遺構が数多く検出されています。各時代とも様々な問題をはらんでいますが、特に古墳時代中期は大規模の集落が展開しており、周辺で調査された遺跡との関連や古墳時代後期から平安時代の水場状遺構は集落と水場との関係を究明していく必要があるとの報告でした。

9．**伊勢原市成瀬第二地区遺跡群**では、縄文時代から近世までの数多くの遺構・遺物が発見されており、弥生時代末から古墳時代前期初頭では地域の拠点集落が、また古代では集落遺跡相互の有機的関係や古代の開発の諸相が明らかになり、中世では丸山城の具体像の部分的な把握がされ、誰の城でどのような機能はたしたか？一石が投じられました。

10．**津久井城址御屋敷跡**では、中世・近世を中心に数多くの遺構・遺物が確認され、その他には縄文時代、近世から近代も確認されました。中でも後北条時代の考古学研究、特に寝小屋式城郭、館跡について、また近世初頭の屋敷跡について資料提供がなされました。

11．**箱根旧街道畑宿一里塚**では、一里塚の保存整備を目的に、文化財の確認のために発掘調査、資料調査が行なわれ、その結果をもとに基本方針を定め、保存整備工事が実施された報告でした。

通常の調査発表は記録保存が前提ということが多く、今回は後世に文化財保護し、守り伝えることができた大変良いケースの報告でした。

すべての発表終了後、伊東秀吉副会長より閉会の挨拶があり、無事に日程を終了することができました。

（事務局－伊勢原市教育委員会　諏訪間　真）

平成12年度通常総会のご案内

▶日時　平成12年６月３日㈯　午後１時
▶場所　かながわ県民センター（２Ｆホール）
▶議題　平成11年度事業報告　ほか

総会終了後、「考古トピックス」（昨年の県内動向）を行いますので、併せてのご出席をお願いします。

考古かながわ　第18号

発　行　神奈川県考古学会
発行日　2000（平成12）年３月31日
編集者　近藤英夫・曽根博明・土井永好
　　降矢順子・村澤正弘
事務局　東海大学文学部考古学研究室内
　　〒259-1207　平塚市北金目1117
　　郵便振替　00240－9－71208
　　神奈川県考古学会
印刷所　コジマ印刷